

先人の知恵から

51

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回は「ま行～み行」まで以下の10個。
残すは「ま行」の残りと「や行、ら行、わ行」
のみ。今年中には終わるのかなと思いつつ。
あと少し。

- 負け犬の遠吠え
- 負けるが勝ち
- 待てば海路の日和あかいろ ひより
- 学べば則ち固ならずすなわ こと
- 迷う者は路を問わず
- 丸くとも一角あれや人心ひとかど
- 身修まりて後家齊うおき ととの
- 身から出た錆
- 自ら勝つ者は強し
- 自ら見る之を明と謂う

＜負け犬の遠吠え＞

臆病な者が、かげでからいばりすること
のたとえ。喧嘩に弱い犬は相手から遠く離
れたところから吠え立てるということから。
単に「犬の遠吠え」ともいう。

「弱い犬ほど良く吠える」というが、余り
陰で文句ばかり言っているのは、負け犬の
遠吠えと一緒に伝えることがある。文句
があるなら、またその内容が正しいのであ
れば、堂々と面と向かって相手に話せばよ
い。

揉め事が苦手、穏やかに過ごそうとばかり
する傾向がある子どもたちに、あえてこ
の諺をぶつけることが増えた。陰でぶつぶ
つ言ったり、SNSで匿名でつぶやいたりす
ることは、格好良いことではない。言いたい
ことがあるなら、堂々と言えばよいのだ。

堂々と言えないなら口を噤むべきである。こそこそと、SNS で言いたい放題言っているのは、卑怯だ。

言いたいことはあるが、自分に火の粉がかかるのは厭だというのは、少し虫が良すぎるのかもしれない。以前であれば、新聞の投稿欄に投稿する人もいた。もちろんそこでも匿名というやり方はあった。新聞の投稿欄より、SNS は気軽で、誤字脱字があろうが、書いていることが支離滅裂であろうが、すべて流れてしまうことになる。そして、そんな投稿に踊らされている人たちは、滑稽としか言いようがない。

言論の自由の中で、言うべきことは、主張すべきことは、きちんと主張すればよいのだ。おかしいと思ったら、おかしいと言えばよいし、賛同するときも、しっかり賛同すれば良い。匿名やハンドル名だけで、他人を誹謗中傷するようなことは、腰抜けの、卑怯者のすることだと子どもたちには伝えていきたい。

<負けるが勝ち>

時には相手に勝を譲って、徹底的に勝負を争わないことが、かえって有利な結果となり、勝ちに結びつくという事。いろはがるた（江戸）の一つ

勝ち負けにこだわる子どもたちが一定数いる。勝てないと全てがだめになってしまう子たちだ。一番じゃないとダメ、百点じゃないとダメ、完璧じゃないとダメ。そんなことをしていたら潰れてしまうのは目に見えている。持てる力以上を出そうとすれば、当然無理が祟って潰れる。

そんな子どもたちにこの諺を伝えることがある。「負ける」という言葉を聞いただけで拒否反応を示すような子らだが、「勝ちを譲る」という言葉だと、納得しやすいように思う。この諺が入ると、この子どもたちはずっと楽に生きられるようになるのだ。

生きにくさを持つ子どもたちが、少しでも生きやすくなれるように、この諺を生かしていきたい。

<待てば海路の日和あり>

海が荒れていても、じっとまっていれば必ず航海に適した日が来るとのこと。転じて、今は状況が思わしくなくても、焦らずに待っていれば、必ず幸運が訪れてくるという事。

不登校の子を持つ保護者と関わっていると、保護者が焦っている間は良いほうに動かないと長年の経験が教えてくれる。保護者にしてみれば、中学校は3年間しかないし、高校は休みすぎれば留年ということになるため、時間に追われ、焦っている。しかし、長い人生、100年ともいわれる人生のほんの数年のことである。高校中退となっても、別に人生が終わるわけではない。焦っている保護者たちに、「待ちましょう」というと、「いつまで待てばよいのか」と返ってくるが多い。「いつまで」かはわからないが、親がプレッシャーをかけている間は動かないということはわかっているので、まずはプレッシャーをかけないことから始めてもらう。

待つことは難しい。特に世の中がこんなに早く動いている時代では、たとえ1分1

秒でも早くという思いがそここで流れている。そうした流れの速さについていけない子どもたちが増えている。子どもたちのペースで、ゆっくりゆっくり進めていけるような環境を整えてあげると、子どもたちは元気を取り戻してくる。元気になれば、動きが出てくるのだ。

幼児期から急かされて、小学校高学年くらいから疲れ切っていて、中学で心が折れる、そんなパターンになってしまう子どもたちを救うためには、ゆっくりゆったりが必要だ。だからこそ、保護者にも「待つ」姿勢を持ってもらいたい。「待つ」ことは中々難しいが、あえてこの諺を出して、「待ってみましょう」と伝えている。

英語では・・・

Everything comes to him who waits.
(待つものはすべてを得る。)

He that can stay obtains. (待つことのできる者は欲しいものを手にする。)

<学べば則ち固ならず>

学問をすれば視野も広くなり、考え方も柔軟になって、かたくなに一つの考えにとられるということも無くなる。「固」=頑固で独りよがりな事。

出典 論語

子どもたちと関わっていると、「どうして学校に行かねばならないのか?」「どうして勉強しなくちゃいけないのか?」と聞いてくる子がいる。これは今も昔も変わらない。

何故、子どもたちは学校に行かなければならないのかについて、「それが義務だから」

という答えでは納得しない。そんなのは「大人が勝手に決めたこと」だから。

正しい知識を得ることで、間違っていることがわかる。例えばニュースやネットで流れる情報に対し、何が正しくて何が間違っているかについての物差しを我々はしっかり持っているかと言えは疑問である。それでも、基本的な知識がその物差しとなってくれることは多々ある。

学問をすることは様々な知識を得ることである。知識は必ず自分を助けてくれるものでもある。古くから学問をする意味について疑問に思う人が居て、それに対して答える人が居た。この諺もそうした一つの答えである。ずっと昔からこうした答え方をしているという意味で、筆者はこの諺を出して説明することがある。知識が少なく、視野が狭ければ、井の中の蛙になってしまうからと。

<迷う者は路を問わず>

愚かな者に限って、賢者に教えを受けようとしないというたとえ。自分を過信して、人に意見を求めようとしないのは、失敗につながるという事。道に迷う者は、人に道を尋ねないからであるという意から。

出典には、この後に「溺れる者は遂を問わず (溺れる者は浅瀬がどこにあるかを尋ねないからである)」と続く。独善をいましめることば。

出典 荀子

人に道を聴くことは、グーグルマップなどを使うようになって減った。マップを読めない場合、或いはマップを見てもわから

ない時に限るだろう。ただ道に関してだけなら聞かなくても済むかもしれないが、いろいろな場面で、「人に聞けばよいのに」と思うことが増えた。

わからないことをわからないままで、結局仕事上のミスを増やし、叱責されて職場に行けなくなったなどと言う相談が来るのだ。どのタイミングで訊けば良いかわからない、忙しそうだから声を掛けられない、声を掛けたら怒られるのではないかと、などと思って、ひたすら困りながら、思い込みで勝手なことをしてしまい、怒られてしまうのである。以前「聞くは一時の恥・・・」という諺も紹介したが、訊くときにちょっと一言添えることができれば訊けるのである。「ちょっといいでしょうか?」「今大丈夫でしょうか?」「確認したいことがあるのですが・・・」等の言葉がけから始めれば、相手も今はダメならダメというだろうし、大丈夫なら「いいよ」というだろう。何も前置きをせずに、突然「〇〇は××でよいか?」などと言えば、訊かれた方は注意を向けていないから聞こえなかったりして、「は?何?」と怒ったように言ったり「何を藪から棒に言っているんだ」と気分を害することもあるだろう。

手順を守れば相手の気分を害することなく訊くことができるのだが、その手順を怠るからうまくいかない。道を訊くのだって、通行人に突然「〇〇駅はどこ?」と訊いたりしないだろう。「ちょっとすみませんが」と声をかけるのが普通だ。

また、きちんとわからないことを訊いて理解して行けば、そのあともずっと楽になるのに、ぐずぐずと訊かずにおいておいて、困って困ってやっときくと「なんでもっと

早く聞かないんだ!」と怒られることにもなる。

最初の内はいくらでも訊けるのだから、最初のうちにどんどん訊けば良いといつも伝えている。仕事の上でもなんでも一緒である。自分で調べてわかることは調べたらよいが、調べてもわからなかったら早めに訊くことが上手く生きていくコツの一つではないかと思う。

<丸くとも一角あれや人心>

性格が円満であるのは良いが、時と場合によっては自分の意地を通すような一面があるほうが良いという事。

良い子で居ようとする子が増えたのは、以前から書いている通りである。人に嫌われないように、目立たないように、親にも友達にも先生にも良い子で、にこにこ穏やかな姿を見せしている。誰かの意見に合わせ、自分の意見は言わない。そんな子たちに伝えたいのがこの諺である。

人の言う通りですべて納得できるはずはない。「違う」「そうじゃない」と思うことが必ずあるはずだ。それでも人に合わせて、「そうだね」「そう思うよ」と合わせている子に言いたいのだ。「それでよいのか?」と。「自分」をしっかり持つことは大切である。人にある程度合わせることも必要ではあるが、あれもこれも、すべて人に合わせていたら苦しくなるだろう。自分を殺しすぎである。

どうしても納得できないことがあったら、或いはどうしても同調できないことがあっ

たら、しっかりと自分の意見を言おう！自分を出そう！「自分はそうは思わない」と言おう！みんなが右に行くから自分も右ではなく、一人左に行くこともあって良いのだ。その方が人間らしいのだ。人の言うなりで、Yes man できるとしたら、それはロボットと同じなのだ。人間が人間らしく、人間として生きるためにも、もっと自分を出そう。

<身修まりて後家斉う>

わが身の行いを正しく修めてこそ、家庭を上手く治めることができる。

出典 大学

この諺は若い母親たちに度々使っている。子どもや夫のダメなところばかりをあげつらい、自分のことを棚上げしている母親がいる。折角縁があって一緒になって、子どもまで生まれたのだから、何とか家族を上手く回していく知恵が必要である。それを、あれがだめ、これがだめとダメ出しばかりしていたら、そして子どもも、「わざと泣いて私に意地悪する」と憎らし気に言うようでは、母子の関係も夫婦の関係も家族全体が上手く回らなくなるのは明らかだ。

自分自身の態度、行いをきちんとしていけば、子どもも夫も少しずつでも変わっていくだろう。それでも変わらなければ文句を言えばよいのだ。先ずは人を変えるより自分を変えるところからやってみようという意味でこの諺を伝える。

<身から出た錆>

自分自身が犯した行いや過失のために、あとで禍を受けて苦しむこと。刃身から出た錆が刃身を腐らせてしまう意から。「身から出した錆」ともいう。いろはがるた(江戸)の一つ。

この諺は、時々使う。嘘ばかりついてしまって、家族や先生方から信じてもらえなくなった子などに、この諺を出して説明するのだ。オオカミ少年の話もする。人は時として嘘をついてしまうことがある。嘘にも良い嘘、仕方ない嘘があるだろう。人を守るための嘘というのにも存在する。

しかし、自分の不都合をごまかすために嘘をついていると、結局つじつまが合わなくなり、嘘が全部ばれてしまうことになる。そういう状況になった子には、つい嘘をつきたくなってしまふ気持ちは受け止めつつも、嘘をつくという行動が、結果的に自分自身を信頼してもらえない人間にしてしまうのだと伝え、そんな自分で良いのかと訊く。人に信じてもらえないのはとても寂しいし辛いことだと説く。それでもかまわないと居直る子もいるが、そういう時は「君がそれでよいならいいよ。私は困らない。」と言い放つこともある。

自分でやってしまったことは自分で責任を取るしかない。誰かが替わりに責任を取ってくれることなどないのだから。嘘をついてしまったら、すぐに謝って嘘だったことを詫びて、信頼に足る人間になっていこうよと伝える。

同様に自分がやってしまった失敗のせいで、自分が困った状態に陥ったとしても、それも自分の責任だから、きちんと責任を取

らないと、後々自分が困ることになるよとこの諺を伝えている。

<自ら勝つ者は強し>

自分の欲望を抑えることのできる者こそ、真の強者であるということ。

出典には「人に勝つ者は力あり、自ら勝つ者は強し（人に勝つ者は力があるだけだが、自分に打ち勝つ者は本当の強者である。）」とある。

出典 老子

自分で自分をコントロールするのは中々難しい。特に怒りの感情は抑えるのが難しいし、ゲームややりたいことをやらずに、やりたくない勉強をするなどと言うのは一番難しいかもしれない。そこで自分を自制することができる人はきっと成功するだろう。

野球の大谷選手やイチロー選手のような成功者は、自分に対してシビアだ。プロボクサーやプロサッカー選手にしても、ストイックなところがある。自分を律することができないと、自分の体を良い状態で保つことができない。体を良い状態に保てないと、良いパフォーマンスが出来ない。自分の欲望のままに過ごしていたら、体も崩れ、良い結果を出すことなどできなくなる。

運動選手に限らず、自分の言動をしっかり見つめながら、よく考えて行動するなら、政治家も教育者も、破廉恥な罪で捕まることなどないだろう。

人が成功するためには、何らかの犠牲も必要だろう。何かを成し遂げるために、自分を律すること、それが成功の秘訣なのだと子どもたちにも伝えたい。最近の子どもたちは好き勝手、やりたい放題の感じが否め

ないから。

<自ら見る之を明と謂う>

他人を知るのではなく、自分を見つめ、自分を知ることが真の明知であるという事。

出典では、この前に「知ることの難きは人を見るに在らず、自ら見るに在り。故に曰く」とある。

出典 韓非子

前述の諺とも似ているが、他人のことばかり言う子がいる。自分のことを棚に上げて、同じようなことをしているのにも関わらず、他人のことばかり言うのだ。自分を知るのは意外と難しい。自分で自分は見えないからだ。小さいうちはともかく、小学生になって、客観的に自分を見ることができるようになると、他人のことばかり言わなくなってくるのが普通だろう。それでも他人のことばかり言う子も大人もいる。それはやはり客観視が出来ていないからである。

客観視をさせるためにも、自分の言動を一つ一つ振り返り、確認していくことが必要になる。時には、やったこともやっていないと言い張る子に出会うこともある。如何にその子がやった行動であるということを納得させられるかにかかっている。丁寧な話し合いが必要で、信頼関係も大事である。自分ではやったつもりがなくても、やってしまうことはあるのだと伝え、その子を否定せず、その行動を否定し、行動は修正できるということを説明していくと、徐々に理解が進む。自分がやったことをやったと認められることができるようになると、その子は大きく成長する。

この諺を出して、自分を知るということの難しさと、自分を知ることができた子は素晴らしいのだと何度も話している。

出典説明

論語・・・二十編

儒教の経典。「大学」「中庸」「孟子」とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、講師の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知る上で極めて重要な資料である。

荀子・・・全二十卷三十二編

中国、戦国時代末期の儒家。姓は荀、名は況。荀卿、孫卿と損傷される。趙の人。齊に遊学した後、楚に仕えた。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、礼法による秩序維持を重んじた。『荀子』二十卷は荀子とその一門の著とされている。

大学・・・全三卷

中国古代の兵法書。周の太公望の著とも、また、前漢の張良が土橋の上で黄石公から授けられたとも伝えられるが、後世の偽作と言われる。上略・中略・下略の三卷から成り、老荘思想を基調とした治国平天下の大道から政略・戦略の道を論じている。同じ兵法書の『六韜』と併称され『六韜三略』ともいう。

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経（老子）』二巻を著したという。

韓非子・・・

中国、戦国時代末期の思想家韓非の尊称。韓の公子（貴族の子）。荀子に師事して刑名学（法治主義）を学んだ。国の弱体化を憂い国王を諫めたが入れられず、発憤して「韓非子」五十五編を著して法による政治を論じた。のち、秦に使いしたとき、謀略にあい自殺した。